燭剪

ノ如シ、○中略八百善形ノ燭臺八百善ハ新鳥越ノ料理店也、近年ハ自家ニ客セズ、出前ノミトス、江戸一ノ高名トス、

〔臨時客應接〕勝手へ燭臺手燭の用意をも談置、日暮方見計ひ、蠟燭の心を指にて爪交挫、火を擧し、燭臺へ差、燭剪掛を手前にして持出、跪て上座と客人の方へ寄て置べし、なをくでんあり

〔饅頭屋本節用集之財寶〕燭剪

〔書言字考節用集七器財〕燭剪

〔類聚名物考調度十八〕燭切　ゑよくきり　今云心切

禪林小歌注、聖岡作　燭臺燭切、以可レ切ニ蠟燭一○圖略

今思ふに、この燭切は今の心切の事なり、この形ゑたる物今も有り、この書は建武の末の比に出來しものといへり、

〔和漢三才圖會三十二家飾具〕燭剪俗云志牟木里

燭剪可以切去燭燼、每置於燭臺、

〔異制庭訓往來〕白鐵燭臺、赤銅之燭剪等各五對、

〔後水尾院當時年中行事上正月〕一正月朔日、○中略勾當內侍左手に盃男の御とほしの料なり をもち、右の手にさ。きとりをとりて、母屋の南の間をへて、御前にすゝみ盃を置、燭のさきをとり、れん臺の中央の間の東の障子を明てゑりぞく、

〔臨時客應接〕心○燭蠟を剪ば、右の手にて燭剪壺の蓋を取、左の手に壺を持、右の手に鋏を持、跪て心を切、壺へ入、早く蓋をすべし、燭臺二挺ならば、燭剪壺は其儘下に置、蓋を取、右の手に鋏を持、左の手にて蠟燭を下へおろし、心を剪、早く蓋をして、蠟燭を燭臺へ差べし、若燭剪ゑん剪壺なくば、心を剪時、勝手より唾壺へ水を少し入、火箸歟杉箸にても持添出、唾壺へゑんを剪て入、次の間壁歟襖際に置べしなをくでんあり